

大人のアトリエ訪問

# 「鉱石ラジオの 生まれる場所」

## 小林健二×中野不二男

今号のふろくは鉱石での検波もできるラジオキット。  
このページでは<鉱石検波>という側面に的を絞って、  
いろんな角度からその魅力を探ってみた。

鉱石ラジオにおいては日本…

いや世界的にも造詣の深いアーティスト・小林氏。  
興味深い工具が並ぶ秘密基地のような彼のアトリエに、  
山荘までDIYしてしまった  
異色のサイエンスノンフィクション作家・中野氏が訪問。  
くったくなく語り合う2人の元・子どもは、  
小さな鉱石がつかまえる  
<見えないけれど確かに存在するもの>を、  
まさに透明な瞳でつかまえているように見えた。

文/胡口桂子 写真/中村冬男

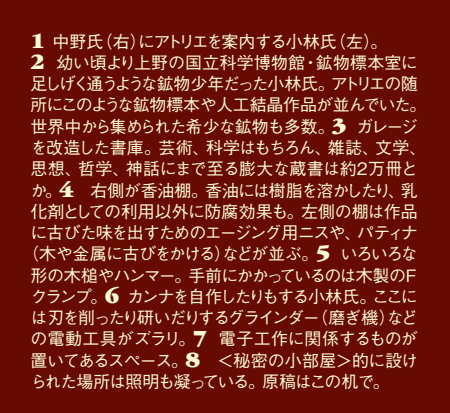
### 小林健二

こばやし けんじ / 1957年、東京都生まれ。アーティストとして絵画や立体作品を創作しつつ、80年代以降は鉱石ラジオをはじめ科学原理を応用して美しさを表現するような作品を数多く発表。97年上梓した『ぼくらの鉱石ラジオ』は、鉱石ラジオの原典ともなりえる名著。

### 中野不二男

なかの ふじお / 1950年、新潟県生まれ。大宅壮一ノンフィクション賞受賞。ノンフィクション分野で活躍のサイエンス作家としてはもちろん、その匠巻のDIYぶりで世の工作少年少女に夢と希望をプレゼントしてくれた。名著『知的DIYの技術』著者という側面も。





## 「鉱石ラジオって、こんなによく聞こえるんだなあ」

鉱石、ゲルマ、真空管…あらゆるラジオ工作を楽しみ、ついに山荘まで作ってしまった根っからの工作少年・中野氏。アトリエに入るなり工具談義でひと白熱すると、話は工具から工作へ、そして聞こえそうもないラジオから聞こえる、不思議を感じとる科学の心へと及んでいった。

### 聞こえそうもないものから聞こえる面白さ

小林：鉱石ラジオを研究したいと思った理由のひとつに、もともと鉱物が好きなものがあるけど「鉱石ラジオ」という言葉の持つある種の不思議さにひかれたんだ。石で放送が聞けるって…いかにもできなさそうでしょ。何か効率を超えた部分でおもしろさを感じた訳ですよ。子どもの頃から工作に熱中してきたんで、じゃあ作ってみようか、とね。

中野：あー、ぼくね、宇宙開発にばかりかかわってるでしょ。で、いつも思うのは、アメリカと日本の開発の違いですね。これはもちろん歴史もあるんですけど、アメリカの方は成功率0%からのスタートなんです。もちろんある程度の計画は積んだけど、成功率50%程度で走っちゃう

ところがある。で、積み上げていく。ところが日本は、失敗率0%からのスタートなんです。失敗しちゃういけないっていうことが前提にある。

小林：それ、胃が痛くなりますよね。ちなみにこれ(と、P.8写真のラジオをさして)いかにもラジオって感じしないでしょ。

中野：だからこそ意外性があるっていい。しかもこれ(検波鉱石をさして)透明じゃないですか! 普通、検波に使う鉱石っていうと金属的なイメージのある……。

小林：そうそう、方鉛鉱とかが一般的ですよ。そういうものを使ってさえ、ほんとに聞こえるのか?っていうレベルの認識だとも思うし。でもなんかぼくの中で鉱石ラジオって、何か透過したイメージが漠然とあってね。作品にするならそういうのを形にしたかったんです。で、いろいろ調べるうちにこんな透過性のある検

波鉱石が見つかった。…なんか、こう、聞こえそうもないものから聞こえるのいいでしょう。で、もちろんこれ、聞こえるんですよ。それはやっぱり、子どももビックリしますよね。子どもって直感的にビックリしてるんで、学術的にビックリしてるわけじゃないんですけど。大人はさらにビックリする。聞こえるはずないっていう先入観があるからね。中野さん、ちょっと聞いてみませんか?(中野氏にイヤホンを手渡す)

中野：あっ、聞こえた! すごいすごい!

小林：ねっ? この、透明な石で。

中野：これ…すごいね、これ!

小林：すごいでしょ〜?

中野：これはおもしろい!

小林：子どものときに初めてこれで聞こえたら、やっぱり世の中にはわからないことがあるということを実感すると思うんですよ。

中野：鉱石で聞こえるっていうのはね。

小林：しかも、この赤い石。これ、透き通ってるっていうのが…しつこいですけど、なんか、結構……。中野：いや、わかりますよ。これは……まさに奇想天外。

小林：これで聞こえるとなると、一体なんだろうって考えると思うんです。もちろん大人だって子どものようにビックリするでしょう。

中野：いやあ、そうですよ。うん。

小林：それが、このものが持つ一番大事なことで。たとえばこのことを大人が子どもに説明するとき、どこまで説明できるかっていったら、ほとんど説明できないと思うんですよ。つまり人間ってまだまだ知らないことがたくさんある。勉強しなきゃいけない、じゃなくて、勉強できる余地があるってことだと思うんですよ。どうもね、今の世の中だと、大人は勉強しなきゃ

いけない、子どもに教えなきゃいけないと思いがちだけど、大人が子どもに「実は世の中にはわからないことがあるんだ」と言える勇気を持てる世の中の方が、ぼくはいいと思うんですよ。

### 電池がないのに聞こえる! 「空中には電気が飛んでいるんだね」

中野：実はうちの子どもは2人もゲルマニウムラジオを作った経験があるんです。娘の方はちょうど小学校3年のときに最初のゲルマを作らせたんですけど、やっぱり子どもにとってあれはすごい印象に残っちゃうみたいですよ。

小林：電池がないっていうのがね。

中野：そう、それ! 「空中には電気が飛んでいるんだね!」っていうんですよ。これが重要な

部分なんですよ。小林：その通りですね。電源がないものが動かないっていう固定概念が、意外と幼い頃からすり込まれてるんですよ。電池がないのに聞こえるっていうことが、目に見えないものがこの世の中にはあるってことを感じさせる力にはなると思います。

中野：つい先日、子どもに「昔の電話100ボルトささなくていいんだぞ」っていったら、「え、どうして? どこから電気がきてるの?」と、うちの子、わかんないわけですよ。で、「ためしにお前ここ(固定電話回線のモジュラージャックをはずした部分)触ってみろ」と触らせたら、「わっ!」なんてやりましたよ。いろんなガラクタ(機能)くっつけてるから、増幅するために今100ボルト必要になってるけど、本来は電気だけで生きています。これはやっぱり教えていかないと…。